詩篇　第23編　1節

「主は私の羊飼い。私は、乏しいことがありません。」

今日も世界は感染症に立ち向かっている。いまのところこの病に有効な治療手段がない。そのなかで日夜、いのちをつなぎとめるための最善の処置を医療現場で試みられている。今、この社会において出来ることを最大限に尽く、変化する症状に正面から向き合っている。

時々映し出される医療現場では、様々な医療機器が配置され、その間をぬうように医療関係者が慌ただしく動く姿が見える。音が極力抑えられているせいか、静かな空間に時折医療関係者の声が聞こえる。病床に横たわる者は酸素マスクで顔を覆われ、いま生きる闘いをしている。対面することの叶わない、伴侶のため、家族のため、友人を思いながらの闘いである。治療を模索する中で忍耐し進む力は人々とのつながりであり、愛情である。

使命に生きる医療従事者の思い、自宅で待ち続ける家族愛、友人たちとの友情が病床に横たわる者を癒しへの力、望みとなる。与えられたいのちを愛しみ、自分のいのちを愛するように隣人を愛する生き方を生きる試練のときである。そのすべてを下支えするのは、主は我が牧者であり、乏しいことがない歌であり、告白である。